

警察のエアカーが、サイレンの金切声で車列を蹴散らしながら、私の車の背後に追いせまってきた。一度はおとなくしく道をゆずってやろうとしたが、警察車の車内をちらつとのぞきこんだはずみに気が変わった。たまたま、制服警官が腕をふりあげて、隣りに座っている人間の口のあたりを殴りつける光景を見てしまったからだ。

私は車の速度をあげて、追い抜こうとする警察車の鼻面をおさえ、わざと邪魔しにかかった。かんかんに怒った警官が私に停車を命じるようにわざとしむけたのだった。

私は停止命令に従って車を道路の端に停め、そのまま知らぬ顔で待ちかまえた。警察車を降りた制服警官が、物騒な表情を浮かべてやってきた。意地の悪そうな面がまえを一目見ただけで、そいつが根性曲りの嫌われ者だとわかった。制服警官は威丈高にわめいた。

「なんのつもりだ、きさま。ふざけたまねをしゃがって、ただではすまさんぞ」

「さあ、なんのつもりだろうかね？」

私は警察車に顎をしゃくった。「車のなかの連中はなにをしたんだ？ きみの悪口でもいったんで殴られたのか？ 市民が見ているようなところで容疑者を殴るもんじ

「やないね」

「車を降りろ」そいつはすごい声でいった。

「道交法違反と公務執行妨害だ。市警本部へ連行する」

「いいとも、行こう。連行してもらおうか」

「車から降りろといっているんだ。ひきずり出してもらいたいのか？ どうやら痛い目にあいたいようだな」

そいつは腕を伸ばして私の胸ぐらをつかみ、路面にしゃにむにひきずり落そうとした。私はシートから一センチも動いてやらなかった。

「抵抗するかっ、きさまっ」

制服警官は逆上した。腰のサックから麻痺銃をひきぬいで、私の顔に押しつけた。生身の人間がこいつを食うと、まず四、五時間は死体同然、全身の神経がいかれて動けなくなってしまう。麻痺から回復するときの痛さもまた格別だ。針を十万本ほど吹きつけられたような気がする。拷問とたいして変わらない。

制服警官はにやりとして麻痺銃を発射した。

私の反応は彼の予想を大きく裏切った。スイッチを切られたようにぐんにやりなるはずの私が、平然と笑いかえしたからだ。

警官の顔が驚きにゆがんだ。

「麻痺銃が故障したわけじゃないさ」

私は教えてやった。「私をぶっ倒すんなら、熱線銃かハンド・ミサイルを持ってこい。ついでに戦車に乗ってくる

んだな」

私は認識票を取り出して、彼の鼻面に押しつけた。

首都圏警察本部特捜官野田俊太郎警部。

「サイボーグ特捜官！」

制服警官の眼は皿のように大きくなった。みるみる高圧的な態度が消え失せた。タイヤがパンクしたのとおなじだ。「さあ、市警本部へ行こうじゃないか」

私はこういう手合いが大嫌いだ。職権をかさに着て、むやみに威張りちらし、警察の評判を落すのは、もっぱらこういった制服のならず者なのだ。

私は制服のごろつきを市警の署長室にひっぱって行き、署長の面前で絞めあげてやった。

放免したときの制服警官は石のようにしゃちよこばり、紙のような顔色になっていた。眼は刃物みたいに白かった。腹の底から私を憎悪していたにちがいない。

署長は終始、苦虫を噛みつぶしたような顔つきだった。他所者の特捜官に自分の部下の非をつつきまわされて、いい気持でいられるはずがない。首都圏警察本部の特捜官は、いつてみれば公儀隠密みたいな存在だ。

署長がどんな顔をしようと、私は平気だった。いやがられるのも私の仕事の一部である。

それより、私は制服のごろつきに車のなかで殴られていた人物に興味を持った。

ジュンとレイというふたりのハイティーンの若者だった。最近の若い連中によく見かけるタイプで、男か女か、さっぱり見当もつかない外見を持っていた。ほっそりと優雅な身体つき、なめらかな皮膚、きれいな顔立ち。しなやかな身のこなしと澄みきった声。手入れの行きとどいた長い髪が美しい。第一次性徴を確かめないかぎり、判断のつけようがないのだ。彼らの上には、さながら人類の進化があらわれているようだった。

このふたりは、べつに犯罪容疑者としてひっぱられたわけではなかった。その申し立てによれば、殺人事件の目撃者なのだが、証言につじつまが合わぬというかどで、精神測定法にかけられようとしていたのである。

精神測定とは俗にいう脳みそゆすりで、嘘発見機が怪物化したものだ。こいつにかかると、心の内容を洗いざらいさらけだしてしまう。警察の協力者に対する返礼としては、まったく恩知らずなふるまいだ。

制服のごろつきの申し立てでは、このふたりは、まったく信用できぬうそつきで、悪どいいたずらをはかったというのだった。根も葉もないでたらめを主張し、警察の公務を妨害しようと試みたという。脳みそゆすりをかけてでも、彼らの主張をくつがえし、徹底的にとつちめてやらねば、しめしがつかない。

私が思うところあって、ジュンとレイの目撃した殺人事件を手がけたいと申し出ると、署長はひどく驚いたようだ

った。

「特捜官ともあるうものが、たかが子どもものいたずら騒ぎに首をつっこむというんですか?! その子どもたちは、故意にうそをついたのではないかも知れません。たぶん、くすりを呑んだあげく、頭がおかしくなつて幻覚を見たんでしよう。最近の若い連中は夢想剤の常用者が多いのです。ともかく、殺人が行なわれたという証拠はなにもないんですよ」

「しらべてみればわかりますよ。この事件は私がひき受けます。かまわんでしょうな?」

「いいでしょう、好きなように。しかし、あなたのその特別製の身体が夜泣きするんじゃないですか」

私はサイボーグ 内臓や骨格、筋肉の大部分を人工器官にとりかえた改体者なのだ。超人の身体を持つサイボーグ特捜官と呼ばれている。

「事件の卵をだいじにあたためてみますよ。かえしてみれば、思いがけない怪物になっているかも知れない」

「怪物? それはどういう意味です?」

私はなににもこたえず、私の真意をはかりかねて、思い悩んでいる署長を残し、署長室を立ち去った。

2

ふたりの若もの ジュンとレイは脳みそゆすりにかけ

られずにすんだ。私が釈放の手つづきをとってやったからだ。ふたりはおおいに私に感謝した。

「あなたが好きです」と、ジュンは率直すぎるくらいの熱意をこめていった。

「あなたはとてもいいかたですわ。たすけていただいたからじゃなく……あたしたち、一目見ればわかります」

「あなたも、あたしたちを好いてくださってるでしょ？」
レイはくつくつとかわいらしく笑いながらいった。

「すぐわかるんです。精神感応テレパスですわ。たすけてくださったのも、あたしたちを可哀そうに思っただけじゃなくて、ほかにも理由があつてなさつたんでしょ？」

「きみたちは感応術者テレパスなのか?! なぜ、そんなことがわかる?」

まさに凶星であつた。私は単なる酔狂や気まぐれから、市警のなわばりを荒らしにかかったわけではなかつた。れつきとした目的あつてのことだつたのだ。

「ご心配なく。だれにもそんなこといいませんから……」
と、レイはまたしても私の懸念をみごとに読みとつていった。

私は目をみはる思いで、この奇妙な若ものたちを見詰めた。美しく魅力にあふれており、しかも特殊な才能を持っている。

「あたしたち、いつも仲間テレパスで精神感応の練習をするんです。たがいに相手の心に溶けこむようにするんです。はじめは

肉体的な接触がいらいますけど、慣れればはなれていてもできるようになります……やってみましょうか？」

私はまた心を読まれてしまったようだ。

ジユンとレイの表情が変わった。眼が焦点を失い、ぼうつとやわらかくうるんだ。小鼻がややふくらみ、唇が半開きになった。まぎれもなく恍惚の表情である。

私はあつげにとられた。ふたりがにわかには神々しくなつてしまったからだ。法悦に浸っている聖女の絵姿を想わせた。硬直したように身じろぎひとつしないジユンとレイの身体は、目に見えぬもやに包まれているようであった。微妙な靈気にも似たものだ。それに触れると、私自身の心も固い花のつぼみが徐々に開くようにゆるみ、反応しはじめた。どつとにわかには暖かいものが心にあふれる。

ジユンの声が唐突に私を現実にはひき戻した。

「警部さん。あなたも精神感応の才能があるみたいね」

ジユンとレイの眼が、いたずらっぽく笑っていた。たいへんうれしそうだった。

「すてきでしたわ。今度あたしたちの精神感応パーティーにぜひいらしてくださいな」

私は、きつと行くといった。このふたりには、なにか妖精じみたところがあつた。私は彼らにしっかりと心をとらえられてしまったようだ。

ジユンとレイの目撃した殺人事件について話しておこう。ふたりの証言によれば、事件が発生したのは、前夜十一時

ごろだった。

ふたりは現場近くで開かれた精神感应パーティーに参加していた。一種の超芸術家肌の若者たちの集まりで、精神感應状態を深めるため合法的麻薬、LSDやメスカリン系の夢想剤が使用される場合もある。

偶然ふたりが戸外に出て、神秘的な気分には浸っているところへ、事件がころげこんだ。

月光に白く輝く道路を、ひとりの女が髪ふり乱し、はだしで逃げてきた。追いつめられた必死の逃走。その背後から追いせまるのは、魔ものじみたひらべつたいエイのような一台のエアカーだった。車体を浮揚させるためのイオン放射が青白く輝き、不気味な雰囲気をやがうえにも高めていたという。

魔物めいたエアカーは背後から女におそいかかり、先端のエッジで烈しく女をはねた。女の身体は三〇メートルもふつとび、宙を舞った。異様な音響がして、あまりのむごたらしさに、ジュンとレイは嘔き気をもよおした。女の身体がふたつにちぎれないのがふしぎなほどだった。女は地面にたたきつけられ、それでも必死にもがいて立ちあがるうとしていた。そこへ二度、三度とエアカーが襲撃し、ついに人間のまるい頭が胴体をはなれて、ころころと転げるのを、ふたりは恐怖と驚きに凍結した眼で見さだめた、というのである。

「そのあいだずっと笑い声が聞こえていたんです……エア

カーの内部から……あんな恐ろしい高笑い、聞いたことありません。生きながら皮を剥ぎとつている地獄の鬼みたいな、ぞつとする笑い声でした……」

しかし、腰がぬけたていのふたりがようやく正気にもどつて警察に通報し、巡回車が到着したときは、魔物じみたエアカーと殺害されたはずの女の死体の影もなく、大量に流し出されたはずの血痕ひとつ発見されなかった。なんとも奇怪な結末だが、ふたりは警察をたばかった科でひっぱられ、受難がはじまつたという次第であった。

ふたりが幻覚にとらわれたのでなければ、合理的な解釈はひとつしか残されない。うそをついたということだ。

しかし、私にはそう思えなかった。鑑識の報告を調べてみようと思いつた。市警本部の電子頭脳センターで鑑識報告をほじくりかえしていると、おかしな二人組がやってきた。

「特捜官の野田警部ですね？ 私は市警殺人課の梶山刑事です。署長の命令であなたの捜査に協力します」

梶山刑事の連れは警察アンドロイドだった。灰色の強化プラスチック製の巨体を持つ人間型ロボットだ。原子力電池をエネルギー源に八〇〇馬力も出す、とほうもない力持ちなのだ。

「協力とは体裁がいいが、実は署長にさしむけられたお目付役じゃないのかね？ 特捜官にお膝元を掻きまわされては、いい気持がしないんだろう？ けっこうだ。私ひとり

で間に合ってるよ」と私はいった。

「ボディ・ガード護衛と考えていただいてもけっこうです」

この刑事の顔はまじめくさったポーカーフェイスだった。「冗談じゃない」私はあきれた。「私をなんだと思ってるんだ。新米の婦人警官じゃないんだぜ。サイボーグ特捜官に護衛が要るなんて都市まちがあるもんか。ギャング組織の殺し屋サイボーグだって特捜官には手をださないんだ」

「私はともかく、このアンドロイドはお役に立つと思いませんよ。戦車に乗るより安全です」

私はいきなり刑事の上衣のすそにかくされたサツクの中身を引き抜いた。通常刑事が持ち歩く超音波方式の麻痺銃パラライザーではなかった。

「プラスチック熱線銃か。ぶっそうな代物を持つてるじゃないか？ この都市まちでは、刑事は兵士並みの重武装なのかね？」

「特別に携帯を許可されたのです。しかし、射ち方は心得ています」

刑事の顔にはなんの表情もなかった。私は熱線銃プラスチックを彼のサツクにもどした。

「どうも気味が悪いね。大げさな喧嘩でいりでもあるのかい？ なんだか恐ろしくなってきた」

「そうならないための用心とお考えください」

「では、梶山君。おたがいに腹を割って話しあおうじゃないか。この事件にはどうも納得のいかないことが多い。いまチエックしてみたんだが、電子頭脳センターには現場の

鑑識報告が届いていないんだ。巡回車の警官はいつたいなにをやっていたんだろう？ ただの怠慢によるミスだろうか？ それとも故意のサボタージュか……目撃者の扱いかたにも納得がいかない。こいつを洗いあげてみたら、どんな化けものが出てくると思うかね？」

「さあ。私にはわかりかねます」

「署長がきみとそのロボット・ゴリラを私のボディガードにつけた理由はなんだろう？」

「私は命令されただけです。理由は署長におたずねになつてはどうでしょう？」

3

現場は金持どもが独占している、とびきり上等の居住区に近い場所だった。広大な地所じしょを占めたうえに、賤民どもを寄せつけぬよう重力線を用いた透明障壁をはりめぐらしてある。この重力バリヤーは高さ二〇メートルの堅固な壁と同じ効果があるのだ。重力場のベルトに沿って、立入禁止の標識が出されている。金持どもは、貧乏人を野良犬と同一視しているのだ。丘や森林の眺めが美しいだけに、なおさら腹立たしかった。

「金持どもは昔も今もすこしも変わらん。美しい包装の中身は腐臭を放っているんだ。やつらが法律の手のとどかないとこで、やってるらんちき騒ぎのことを考えると、胸

がむかつくね」私はいった。しかし、梶山刑事も警察アンドロイドもいっこう気にしていない顔だった。

「金持だつてただの人間です。法律には逆らえはしませんよ」と、刑事。

「法律が万人に平等だつた時代なんて一度もありやしないさ。金持はいつだつて手厚く保護される。だから、なおさらたちが悪くなる。史上最悪の非行少年団はみんな金持のどら息子だぜ。残虐なことといつたら、人食虎だつて顔負けだ」

「その点はみとめますよ」

梶山刑事はめずらしくあいづちをうった。

「ギャングよりもたちが悪い。まさに怪獣みたいなものですね」

声に熱がこもっていた。なにしろ、近ごろの非行少年どもときたら、もぐりの医者にかかつて人体機械化手術サイボーグを受けるのが流行なのだ。改体技術の進歩のおかげで、わりあい気軽に超人願望を充たせるのだから始末悪い。百馬力二百馬力の超腕力で暴力沙汰を起こすとなれば、これは怪獣が暴れるのと等しい。いまや治安関係者にとって一大脅威になりつつあるのも無理からぬことだ。

「特捜官、失礼ですが、あなたの機能はどの程度のものでしょうか？」

私は路上を調べるのに注意を集めていたので、刑事の質問を、ただ好奇心から出たものと受けとった。

「フルパワーで、ざっと三百馬力といったところかな。くわしいことは話せないことになっている。サイボーグ特捜官の機能は機密事項に指定されているんでね」

私の収穫は、路上に流された精密機械用のシリコン・オイルと強化プラスチックの微細な粉末であった。特殊な捜査用メカニズムを備えたサイボーグ特捜官だけのなしうる芸当だった。

「なにかわかりましたか？」

問いかける刑事に、私は思いつきりしぶい笑顔を見せてやった。私は手を伸ばして、強化プラスチックに包まれた警察アンドロイドの部厚い胸部をたたいた。

「もちろん、わかったとも。おまえさんだってそうだろう、なあ、兄弟」

警察アンドロイドは、無表情な顔にはめこまれた赤い電子眼で、私を見返した。

「いいえ、わかりません。情報が不足です」

そいつはガラガラ声でこたえた。

4

ロボット・ゴリラ君が情報不足で雲を掴んでいようと、私には事の真相がわかりかけていた。あのふとどきな制服警官はもちろん知っていた。市警の署長もあるいは、うすうす事情を察していたであろう。知らん顔をきめこんでい

る梶山刑事だってそうだ。市警の連中のほとんどが知っている公然の秘密だったかも知れない。

「殺人事件の捜査は、これで打ち切りだ。ご苦労だったな、梶山君。署長のところへ報告に帰りたまえ。結局、熱線銃^{ブラスタ}には用がなかったわけだ」

そう伝える、と刑事はいった。

「この都市^{まち}は、やっぱり腐っているな。人間が住むかぎり、腐っていない都市なんてありえないのかも知れないが……どうにも我慢がならんのは、腐敗した警官の存在だ。こいつばかりは絶対に許せない」

梶山刑事は耳を持たないような顔で立ち去った。

もちろん、心の清らかな人間たちもこの都市に存在した。ジュンとレイがそうだ。私の知るかぎり、このふたりはこの汚れた世界でもっとも清らかな人々だった。

私はみそぎ^{みそぎ}の意味で、ジュンとレイに逢いたかった。電話をかけると、ふたりはよろこんで私をその夜のパーティーに招待するといってくれた。

私は熱線銃^{ブラスタ}を所持した刑事と警察アンドロイドの意味を掘りさげて考えるべきであった。それでなくては特捜官の資格はない。私はすべてに警告をあたえられていた。

自分の超人的なサイボーグ体への過信が、私をあやまらせたのである。

レイやジュン、その友人たちは、心から私を歓迎してく

れた。二〇人ほどのごちんまりとしたパーティーで、参加者はいずれも年若く、例の性別も定かでない美しい若者たちだった。

私は若者たちにかこまれ、人気を一身に集めた。私はすっかり心とみ、人間らしさを回復した思いだった。彼らの友愛の念はあたたかい湯のように私の心を浸した。

私は事件の真相を彼らに話してきかせた。

「ジユンとレイが目撃したのは、幻の殺人事件だった。殺されたのは人間じゃなかった。女性型のアンドロイドだったんだ。きみたちには理解できないかも知れないが、大金持どもはいろいろ、気ちがいじみた遊びを考えだす。アンドロイドいじめというのがそのひとつだ。人間そっくりに反応するアンドロイドを使ってありとあらゆる残酷な遊びを楽しむんだ。いじめぬいてなぶり殺しにする。生身の人間には果せない邪魔な欲望を、アンドロイドでみたすというわけだ。まったく狂気の沙汰だよ。おそろしく高価なアンドロイドを、そのために平気で潰してしまうわけだからね……ジユンとレイはたまたま、アンドロイドいじめを見てしまったんだ」

むろん、ふたりの通報によって駆けつけた巡回車の警官たちは、なにが生じたか心得ていた。承知の上で、金持どもの所業を陰蔽いんぺいすることに手を貸したのだ。金持というのは、社会のピラミッドの頂上を独占した種族で、権力の所有者とひとつ穴のむじななのだ。彼らのコネは強力無比な

ものであって、政治権力と悪徳官吏が結びつけば、彼らはほとんど不死身になる。小は交通違反から大は殺人事件のもみ消しに至るまで、手厚い保護を受ける。悪徳官吏はライオンのおこぼれをいただくハイエナのようなものだ。ジユンやレイたちは、私の話が信じられないようだった。むりもないことだった。私はそれ以上、汚らしい世界を彼らに垣間見させるのに忍びなかった。

「あたしたちは、なによりも完全な精神を持ちたいんです」レイは夢見るような瞳をあげていった。「精神と精神の完全な調和、とけあう心……人間がみな精神感応で、ひとつの巨大な心をつくれる時がきたら、あたしたちはみな完全な人間になれるんです。そのために、あたしたちはセックスを超越します。肥大した性意識の重圧が、人間の精神を歪める根元だから……」

彼ら若ものたちは、あるいは新しい人類の萌芽だったのかも知れない。セックスは彼らにとって無意味な存在のようであった。

ジユンはぴったり私によりそい、しなやかな指先で私を愛撫した。しかし、この肉体的な接触は、性的なものではなく、精神感応を深めるのに必要な操作だったようだ。ジユンはすぐに驚きの声をあげた。私のサイボーグ体はもとより血と肉をそなえた存在とは異質の硬さを持っていたからだ。

「私の身体は機械製さ。もとからあるのは中枢神経だけだ。

ものを考えるにも電子頭脳の助けが要るほどだ。ときどき自分が人間なのかアンドロイドなのかわからなくなることがある」と私はいった。

「すばらしい精神があればじゅうぶんよ」

ジューンはささやいて、しなやかな身体を押しつけてきた。そのとき、やつらが襲ってきた。どどどと周囲の壁が崩れ落ちた。やつらの怪力は戦車並みだったし、ものを破壊することに無上の快楽を見出す連中だったから、まず建物をぶちこわしにかかったのだ。建物の下敷になった若者たちのおそろしい苦痛の悲鳴があがった。轟音とともに天井が落下し、数百キロもある重量が頭上にのしかかってきた。私の超ポリマーの頭蓋も砕けるばかりの衝撃だった。

私はサイボーグ体のエネルギー制御系を全開放した。のしかかるとほうもない重量を一気にはらいとばした。急激な力がかかったため、服がずたずたにちぎれとび、私はサイボーグ体をむきだしにして立ちあがった。

「そこにいたぜ！」

「サイボーグ野郎だ！」

粗野な声があちこちからかかった。建物は完全に崩壊しつくし、一瞬前までのたたずまいがきれいに消え失せていた。私は赤外線視覚に電子眼を切りかえたのちも、あまりの荒廃ぶりが信じられなかった。

やつらは全部で六人だった。やつらの正体をさとったのは、ひとりが建物の破片をつかんで無造作に私めがけて投

げつけたときだ。はらいのけた腕に猛烈なショックがあった。これは人間の力ではない。まぎれもなくアンドロイドか、私のようなサイボーグの発揮する怪力だとわかった。はじめて、熱線銃と警察アンドロイドの意味がぴんときた。サイボーグ化した非行少年ども。科学文明の産み落した怪物どもだ。

六人ともサイボーグ体を露出したなりで、無毛の頭部はたまごのように滑らかだった。六対の眼が、電子眼特有の淡い蛍光を発している。私は二重視覚を用い、彼らを凝視したまま、足もとの地面をさぐった。無残に破壊され、血泥にまみれた肉塊がある。あの美しいジュンがおし潰されて死んだのだ。

すばらしい若者たちはレイをはじめだれひとりとして助からなかったようだ。

「ちよいとばかり力くらべをしたいんだよ、おっさん。警察でこさえたサイボーグの出来を見たいんだ。ぶっこわれでも悪く思わないでくれよ」

「見たろ、おれたちの馬力を。な、ちよっといかすだろ？」

「最近、やわな相手ばかりで、がっくり来てたのよ。がつちりお相手してね」

「いいだろう」私はべつに声を荒立てずにいった。「気のすむまで相手をしてやる。警察サイボーグの出来をためしってみろ」

やつらは一瞬の遅滞もなく襲ってきた。場慣れのせい、見事にチームワークがとれていた。しかし、私を簡単に仕止められるはずがない。

やつらの打撃が、私の身体のどこを捉えても、ポリスチロールの骨をへし折られたろう。が、私はやつらの打撃がとどくまで、のんびり待っていた。やつらの破壊力はたいしたものだったが、私にはとどかない。

私は電子加速状態に移り、やつらの動きがのろのろと分解された数十分の一秒間に六人全員の片腕をつけ根からもぎとってやった。ついで四肢の関節をことごとくへし折り、逆にねじ曲げる。造作もない仕事だった。

加速状態を解いたあと、すべての破壊の音がひとつの連続音に重なって、私の聴覚にとどいた。やつらの砕かれたサイボーグ体は同時に瓦礫の上に転がった。

叫び声がして、熱線銃を握りしめた梶山刑事と警察アンドロイドの巨体が走ってきた。

「ご無事でしたか?!」

刑事は啞然として惨状を見詰めた。自分の眼を疑っていた。

「もちろんさ」私は冷やかにいった。

「こうなることを恐れていたんです……」

梶山刑事は荒い呼吸をしていた。

「こいつらが、あなたを襲うことは予測されていたんです。

署長が護衛を私に命じたのはそのためです……しかし、

ボデイ・ガード

あなたはすぐにこの都市まちを立ち去られるのかと思って……」

「そうとも、署長もきみも知っていたんだ。私の任務が、市警内部の腐敗を掃除することだとな。市警の悪徳警官が私に手を出しやしないかと恐れていたんだ。私の身になにか起これば、署長の首が怪しくなる……」

むろん、だれがサイボーグ非行少年を私にけしかけたのか、私にはわかっていた。私に顔を潰されたあの制服のごろつきは、どうでも仕返しがしたかったのだ。

「このままではすません。身に覚えのあるやつは、どいつもこいつも覚悟するがいい。徹底的に大掃除してやる。腐れ警官どもを残らずたたきだすまでは、断じてやめないぜ」

私の心は痛憤でたぎりたっていたが、それでも、ジュンやレイたちへの、亡骸なきがらの上に、そそぐ一滴の涙もにじんではこなかった。サイボーグ特捜官は泣くこともできないのだ。

サイボーグ捜査官

デジタル版

発行日 2001年2月13日

著者 平井和正

発行 有限会社ルナテック

〒125 0041

東京都葛飾区東金町3 13 6

info@ebunko.ne.jp

<http://www.ebunko.ne.jp/>

(C) KAZUMASA HIRAI, LUNATECH

本作品は著作権上の保護を受けています。本作品の一部あるいは全部について、無断で複写・複製・転載することは禁じられています。